



# 京都大学 総合人間学部 広報

## 特集 外から見た総人・人環

求められる「おもしろい」研究と教育 .....	丹羽 隆昭.....	2
関係者以外の弁 .....	内田 賢徳.....	4
独りになること、すなわちグローバル化すること .....	間宮 陽介.....	6

## 新任の先生方より

研究のきっかけと、これから .....	永友 文子.....	8
自由とジャズと総合人間学部 .....	齋藤 嘉臣.....	9
「出会いの地理学」を通じた「共生」への道を意識して .....	安藤 哲郎.....	10
私たちのなかの他者、東洋の心と身 .....	金 志玪.....	11
自分の学生生活を振り返って .....	神川 龍馬.....	12
電子の声に耳を傾ける .....	吉田 鉄平.....	13
京大生のプライド .....	吉田 寿雄.....	14

## 特集 外から見た総人・人環

## 求められる「おもしろい」研究と教育

丹羽 隆昭 (関西外国語大学教授)



教養部から総合人間学部への改組が進められていた時期、つまり今から二十数年前のある教授会でのことである。現在では想像もできないが、当時吉田南キャンパスに

は、今の人環大会議室のようにスタッフ全員を収容できる会議室はいうに及ばず、そもそも会議室なるものが存在せず、教授会は耐震改修前の、内も外も廃墟さながら、古くて汚く不細工な校舎の、縦長の大きな階段教室で行われていた。名古屋のキリスト教系私学に長年奉職したのち本学に転勤してきた私にとって、京大という新しい職場の第一印象は、多くのビラやゴミが床や机上に散乱し、壁には容易に拭い落とせぬ落書きが透けて見えるといった、紛争時の名残を色濃くとどめ、時にはホコリが舞う様まで電灯の光にはっきり照射される大教室で、百人を越す先生方がひしめき合って意見を交わす、この教授会のユニークな雰囲気に集約された。今にして思えば懐かしい光景である。

そういう時期のある教授会の席で、当時の木下部長の、やがて発足する新学部を念頭に教員一同への激励を込めていわれたある言葉が、私の耳に今も残っている。教養部時代は所属教員の研究業績が厳しく問われることはまずなかったが、学部昇格に伴って今後はそれが学内外で云々されるのでぜひその心づもりをお願いしたい、という非常

に耳の痛い話の締めくくりとして、「おもしろい研究」をやれと付言されたのである。

「おもしろい研究」とはいかなるものか。その定義も具体例も部長は示されなかった。おそらく部長をはじめ、関西で生まれ育った人にとって「おもしろい」の意味は自明なのであろう。だが、そうではない者には、日頃テレビの漫談などでよく耳にするとはいえ、いざどういふ意味かと問われると今ひとつつかみ所がない。もちろん「おもしろい」と重複する意味部分もあろうが、それだけではない。「し」が抜けただけだが、そのことで逆に特殊なニュアンスが加わっているのは確かだ。標準語の「おもしろい」が伝える理性的な判断基準を越え、良きにつけ悪しきにつけ、より多く人間の感情や本能を抵抗しがたく揺さぶるというような含意があるように感じられ、いかにも本音で生きる関西人が愛好しそうな言葉といえよう。英語ならさしずめ *irresistibly interesting or amusing* というところかというのが、私の勝手な結論である。

従って、木下部長のいわれる「おもしろい研究」とは、これはかなわん、変わっているが無条件でおもしろいわ！と研究者仲間に快哉を叫ばせるような類の研究を指すものなのであろう。決め手は、レベルの図抜けた高さというよりも着想の卓抜さ、ユニークさであろうか。そうなると、旧来の狭い学問領域に留まっているかぎり難しいということにもなる。文系、理系という垣根を飛び越える「学際的」な大胆さも「おもしろい研究」を生

み出す条件かもしれない。「学際的」の第一歩は、たとえば、ためしに自分が所属する学問領域とはまったく違う領域の学会に参加してみるだけでもよい。「おもしろい」体験が得られる可能性があるだろう。

実は、この領域横断という精神こそ、まさに総人・人環発足の柱でもあった。設立以来二十年余。その間多くの優れた研究が吉田南の先生方によって世に問われたのは疑う余地がない。しかし同時にまた、これぞ新学部創設の賜物だというような、世間をうならせる「おもしろい研究」は、厳密な意味ではまだ登場していないのではないか。あまたの学問領域が寄り添い合う文理一体型の部局ゆえ、他にはないこのメリットを何とかもっと大胆に活かした「おもしろい研究」が登場し、世間を、そして時計台をもうならせることができれば、総人・人環の存在理由、アイデンティティーの確立に大きく貢献できるに相違ない。

これは研究面に限ったことではあるまい。本来総人・人環が全学に対して担っている教育、とりわけ教養教育の面でも「おもしろい」ものがたくさん目に付くようでない、全学におけるこの部局の存在意味は薄れてしまう。昨今話題になっている「国際高等教育院」構想はけっして「おもしろい」教育には繋がらないであろう。むしろ本質的に逆方向を、しかもそれをかなり大胆に目指す機関というように私の目には映る。よしや平均点は上がるとしても（たぶんそれも少々疑わしいが）画一的な方向性がどうしても気になる。教養教育はこんなもの、という大きな割り切りが働いているようだ。それは京大には似合わないし、大半の京大生が求めるものとも異なるのではないか。若い学生ひとりひとりの全存在にながしかの抵抗しがたい感動、それこそ震えが来るような何らかの刺激を提供できる教育をこそ、これからの教養教育は目指すべきであり、その実現は二十数年前に新構

想学部として立ち上がった総人の責務であろう。

こういって、総人・人環所属教員の置かれている非常にシビアな教育、研究環境を忘れていないかという議論になるだろう。それはもちろんいうまでもなく大いに問題であって、誰も現状のままではよいとは思ってまい。しかし、そういう議論で立ち止まっているかぎり事は進展せず、けっきょく部局の沈滞を招くのみだ。内外の大学の実情はどこもきわめて厳しい。研究のケの字も見当たらず大学も珍しくなくなったし、教育もとても大学レベルとはいえず惨状をさらす大学もざらである。そこへ行けば、総人・人環の現状がさほどシビアというわけでもあるまい。そうした認識の上に立ち、各方面からどんどん情報を収集し、どこかに利用可能な「おもしろい」方策が隠れていないか、そういうものが見つからないなら何とかそういうものを独力でひねり出し、自らの手でシビアな状況改善のための抜本的プラン、つまりは部局運営改善のための「おもしろい」プランを、「おもしろい研究」や「おもしろい教育」の実現のために本気で模索すべき時がもうとっくに来ているのではあるまいか。

(にわ たかあき)

2004年4月～2006年3月 京都大学教育研究評議員

2008年3月 京都大学退職（京都大学名誉教授）

2009年4月より現職

## 関係者以外の弁

内田 賢徳 (京都大学名誉教授)



「関係者以外立入禁止」、こういう類いの掲示をあちこちで見ると。国家が、安全保障を盾に一層の秘密保護に乗り出そうという今日、これまで以上に多くの場所で、人々

は立ち入ることを制限される。制限は立入から広がって、窮屈な時代が始まろうとしている。

ほとんどの場所で、私は「関係者以外」に括られる。立入が許されるのは、非常勤講師をしている大学の講師控室くらいであろうか。

ふと立ち止まってしまう場所がある。総人・人環構内である。勤務していた頃は気にも止めなかった「関係者以外立入禁止」、間違いなく構内のあらゆる場所で、私は「関係者」であった。入学試験本部という大学では最重要の機密を扱う場所すら毎年出入りしていた。

しかし、私は今その構内に籍をもたない。名誉教授という称号はあるが、それは大学内での何らかの資格とつながるものではない。よく知人から、名誉教授って何ですかと問われる。在職中に不祥事もなく無難に勤め上げたという証明ですから、私を紹介する時は必ず付けて下さい、元教授というのは何らかのいわくのある人を指す言い方ですからと答えることにしている。大方の友人は納得し、そしておまえの場合は不祥事が明るみに出なかったケースだろうと一言多い。

元教授ならぬU名誉教授は、掲示の前で戸惑う。私はもはや「関係者以外」ではないのかと。「以

外」に属する何よりの証拠にこうして「外から見た」と冠する原稿を依頼されているのではないか。

ただ、この構内を歩いて眺めると、様々なものが懐かしく、私との「関係」を留めていてくれる。春、蒲公英はあちこちに咲く。よく見ると、図書館を境に、西は外来の西洋蒲公英が地にあふれるように咲き、東の建物と鬱蒼とした茂みの間には日本蒲公英がひっそりと残って咲く。可憐なその萼は、だからといって摘み取れば絶えてしまうのではないかという趣である。初夏を過ぎる頃に、人環の建物の北側に数本の夏椿が清楚な花を付ける。朝、そこをわざわざ通って、花を数えたりしたものだ。私がそう語るのを聞いて、見に来てくれた人もあった。以前にはその花が似合ったであろうような面差しの人だった。ちょうどその頃、棟の大木が白く群れた花を咲かせる。「妹が見し棟の花は散りぬべし我が泣く涙いまだ干なくに」と萬葉集に詠まれた(山上憶良「日本挽歌」)その哀しい花である。夏休みの期間、夾竹桃は長い不在の夏を彩る。秋に実った柿は、冬の間も木に残り、やがてそこに目白の群れがその実を餌にと飛びまわる。自然の生態はそこにもあって、一匹の猫が木に登ってじっと目白に狙いをつける。猫が餌に成功した場面は見たことがないが、いい根性してるなどと、同じ情景を見ていた、今はもう亡い同僚と話したことが、その季節になると思い出される。

そして、ある春から構内の桜は思い出の中に咲くのみとなった。私が使用した研究室の後には、新任の女性教員が入ることとなった。もちろん掃

除は事務室で手配した業者が丁寧に行くから、汚れたままということはない。しかし、初老の男がほとんど住まったその室には、その気配が籠もる。それは、それらしく室の隅の方にこそ濃厚に残るに違いない。一度様子を見に訪ねてこられた新任の方は、凜とした仕草のあわいにつつましい華やきを感じられる若い女性であった。いよいよ最後に鍵を差して室を出る日、初老云々の詫びを記して、それに香を添えておいた。重力に逆らって上へと流れる細い煙は、古い気配を除染してくれたであろうか。

新しい関係の中で、初めて立ち入った、開講したばかりの頃、K教授が講義に向かう姿が見えた。うつむいて陰鬱そうにしているその姿を見て、もっと胸を張って、張り切って行きなさいよとからかいたくなった。もとより私も始まりの頃の憂鬱感が毎年あった。ただそれは教室に入って、教壇に立ったとたんに消えてゆく不思議な感覚であるから、K教授もそうであるに違いない。生真面目な教師そのものでありながら、どうにかすると生来の茶目っ気を見せて、私を小突いたりする気のいい先生であるK教授とそうしたやりとりをしてみたくなったのである。何よ、自分は辞めたからと思って、と私を小突こうとする笑顔は思い浮かんだが、結局声を掛けなかった。何かが私を制して、以前のような気楽な行動を取らせなかった。思えば、その時から「以外の人」となっていたのである。

辞めて「以外の人」になることによって、別の面で随分気楽になった。会議で president の語尾上げ（正確には文節末上げ）トークに顔をしかめることもなくなった。このごろテレビや巷でもあまり耳にしなくなったのは、この話し方が、一人悦に入ったという風で、本人が気取っているつもりの分、周りからは滑稽に見えてしまうからであろうか。「英語で↑講義する↑」と旗を振られても

何となく重みがない。

気楽ついでに記せば、経営効率が幅をきかせると、教育にも効率、費用対効果ということが当然のように持ち出されてくる。生き残りを懸けた戦略などという、発言している当人は気づかぬ、実に野蛮な謂が会議を主導する。そうしないと経営破綻を迎えかねない、給与だってカットですよといった雰囲気の中に、教育担当理事は、教育経費節減担当理事に成り果てているという意識もないままに旗を振り続ける。よくしたもので、そうすると制度改革、組織改編という斉唱がわき起こる。制度や組織をまるで玩具のように持ち遊ぶことが流行り始める。その提案が手柄としてまかり通ることになると嬉々とする姿は、父坊さながらである。外から見ると人たちに、前のまがユニークでよかったのではないかなどと言われても、咎められることはない。扱いが悪くて動かなくなった玩具のことで子を咎める親は良い親ではない。かくてまた、新しい玩具が現れる……。

そうしたことと無縁に、つまりそれらの一々が時間と神経を蝕むことなく生活できることはいいことだ。「関係者以外立入禁止」の場所にわざわざ入ることもないだろう。

（うちだ まさのり）

2010年4月～2012年3月

京都大学教育研究評議員

京都大学人間・環境学研究所副研究科長

2012年3月 京都大学退職（京都大学名誉教授）

## 独りになること、すなわちグローバル化すること

間宮 陽介 (京都大学名誉教授)



いまの世の中、独りでいるのはなかなか難しい。電車に乗れば10人中、7、8人は携帯電話にいそしんでいる。メールをやり取りする者、ゲームと格闘する者。本人た

ちは真剣そのものだが、端から眺めていると、電線にずらりと並んだ雀のように見えてくる。無惨な光景にいたたまれず目を上にやると、1列に並んだ窓上ポスターが目に入る。多くは大学の広告である。夏が近づくとオープンキャンパスを知らせるポスターで一色となり、入試のシーズンになると、何回でも受験できますといった客寄せの入試案内でいっぱいになる。車外に出るとこれがまた大変だ。大改装なった渋谷や下北沢は駅というより巨大な迷路である。以前は乗り換え通路を身体が覚えていたのに、いまでは雑踏の中をキョロキョロ、指示を頼りに右往左往する田舎のネズミである。渋谷駅といえば、2020年のオリンピック開催国が決まる日の早朝、駅周辺は若者たちで埋め尽くされた。いまでさえこうだから、7年後の東京は狂熱のるつぼと化すことであろう。

祭りが終わると次の祭りを指折り数えて待ち望む。そのうち祭りとの間隔が短くなって、やがて年がら年中祭りとなる。夏のオリンピックの合間に冬のオリンピックが開かれ、さらにその合間を縫うようにサッカーのワールドカップや世界陸上大会が開かれる。テレビも1年中お祭り気分、庶民にとって年に1度のお祭りだった年末の紅白

歌合戦もいまではすっかり色褪せて見える。みんなで神輿を担ぎ、ワッショイ、ワッショイやっていないと、孤独感にさいなまれて仕様がないうふうである。

なんでこんなことを書くかというと、文科省が音頭をとって推進している大学のグローバル化にも神輿の祭りの喧噪を感じ取るからである。世界で通用するグローバル・リーダーを育成する、グローバル人材を育てるためにネイティブ・スピーカーを100人雇用するというのが京都大学のグローバル化らしいが、そんなものだろうか。そのようなことでグローバル化が達成できるなら、第1の開国から150年、1度ならず2度、3度と開国を経験した日本人はとっくの昔、グローバル化をなしとげているはずである。

どうも「グローバル化」の意味を勘違いしているらしい。すべての講義を英語で行えばグローバル化されるという発想は、日本語をローマ字表記すれば国際化がはかられるという考えと同じ精神構造に立つ。この点、われわれは幕末維新の開国から1歩も進歩していない。むしろ退化しているとさえいえる。このぶんで行くと第3の開国はおろか、第4、第5の開国が必要になるであろう。開国は日本人にとっては永久の課題、永遠の改革なのであって、終止符を打つことがない。

なぜそうなのか。ペリーの来航から1世紀半も経つのに、相変わらず開国が国の重要課題となる不思議さ。私なりの考えをいえば、それはグローバル化に狂奔するあまり、人びとがみずから独りになる訓練を怠ってきたからだ。グローバル化とは

独りの状態を脱すること、閉じた自分自身から脱却すること、閉ざされた自国から外に出ることを常に意味してきた。人と人との自然な付き合いの延長としてではなく、日本と外国との2者関係の中で、国を開くものとしてグローバル化が思念され実践されてきたのである。国を開くことは外国の作法に習熟することであり、言語を含むその作法を教えるために教育の場でグローバル化教育が飽きもせず行われてきた。ところが自分や自分の国を抜け出すことは不自然なことだから、グローバル化の狂熱の後には、ナショナリズムや排外主義の狂熱がやってくる。自国に自然生長したものでなければ、それらは他所からの借り物として排撃される。中江兆民の『三酔人経綸問答』に登場する洋学紳士と豪傑君はグローバル化する世界に処す日本人の分身なのである。

国を開くことと国を閉ざすことの悪循環を断ち切るためには、おのれ独りになる瞬間を与えられることがどうしても必要である。人間が社会的存在であることは承知しているし、人間がいつも独りで居れるほど強い存在でないこと、小人閑居すれば不善を為すかもしれないことも重々承知している。にもかかわらず、独りになれる訓練を積みまたその機会が与えられなければ、人は自らを外に向かって開くことはできない。

独りになることは決して自分を閉ざすことではない。カントはケーニヒスベルクの町を生涯出ることがなかったが、かれの哲学はこの小さな町を超出した。モンテーニュがエッセーを書き継いだのは寒々とした牢獄のような部屋だ。いまでは国際的に知られる日本の浮世絵師たちが生きたのは鎖国時代の閉じられた日本である。モーツァルトはダ・ポンテのイタリア語の台本に曲をつけたわけだから、イタリア語を自家葉籠中のものとしていたのは確かである。このようなかれらに国際人だとかグローバル人間だとかいうレッテルを貼るの

は野暮というものである。

大学に話を戻そう。グローバル化教育が推進されるのと反比例するかのようになり、学生、教員の居場所が縮小されている。独りになれる時間と空間は削り取られ、削り取られた時間と空間はグローバル化教育に充てられている。このような教育は機械的に動くグローバル労働者はつくり出すだろうが、じっくり物事を考え、他人の苦しみを自分の苦しみとするようなグローバルな視野をもつ人間を閉め出すだろう。大学のグローバル化教育はグローバル化に逆行するのみならず、大学の自殺行為でもある。外側から京都大学、いや日本の大学を眺めて思うのはこのことである。

(まみや ようすけ)

2005年4月～2013年3月 京都大学教育制度委員会委員

2013年3月 京都大学退職 (京都大学名誉教授)

## 新任の先生方より

### 研究のきっかけと、これから

永友 文子 (認知情報学系)



2013年4月1日付で、総合人間学部 認知情報学系(人間・環境学研究科 共生人間学専攻 認知・行動科学講座)の助教として着任しました。私は、人間・環境学研究科の出身で、鴨川や大文字山、

比叡山を眺めながらの通学(通勤)も今年で6年目になりました。学生時代から慣れ親しんだ母校で教育・研究に携わることができてとても嬉しく思っています。

私の専門は生理学です。身体は、さまざまな刺激に応答・適応しながら生命を維持しています。生理学ではそのような身体の機能やメカニズムを解き明かしていきますが、中でも運動機能の中心的な役割を担っている「骨格筋」に着目しています。骨格筋は、トレーニングしてよく使えばモリモリと太く強くなり、病気やケガで寝たきりになって使わなくなると細く弱くなってしまいうようにきわめて変化に富む組織です。そんな骨格筋の性質や機能が加齢、病気、生活習慣、環境(無重力の宇宙環境への滞在など)の影響でどのように変化していくのか、どのようなメカニズムによって起こるのかを研究しています。また、骨格筋は糖や脂質の代謝に重要であり、メタボリックシンドロームや生活習慣病(とくに糖尿病)の予防や改善のためのカギを握っています。そこで、糖尿病を発症した骨格筋ではどのような変化が生じているのか、骨格筋の機能を回復・向上させて糖尿病を予防・改善するにはどうすればよいのかについても研究しています。

私が生理学の分野で研究をしたいと思うように

なったのは、高校生の時に入院をしたことがきっかけでした。それまでは大きなケガや病気をしたことがなかった私にとって「健康」はあまりに当たり前すぎて、自分の身体のことや健康について考えたことも意識したこともありませんでした。しかし、その入院をきっかけに健康に生活できることの有難さや大切さを初めて感じました。入院中はよく院内をチョロチョロしていたせいでしょうか?幅広い年代の患者さんとたくさん知り合い、病気の話から人生論?まで・・・色々な話を聞かせてもらいました。とても良くしてもらった末期ガンのおばあさんとの「別れ」もありました。そんな日々を過ごす中で、「健康とは何か」、「なぜ病気になるのか」、「死とは何か」、「生命とは何か」ということについて自然と考えるようになり、その答えを身体の仕組みや働きを研究することを通して探していきたいと思いました。

研究をしていると、生命を守るための身体の働きの巧妙さに日々驚かされます。そんな身体的神秘を目の当たりにしていつも感じることは、「私」という存在は生かされているんだなあ、ということです。ひとつの生命体としての「私」を生かすために、ひとつひとつの細胞が生まれたり、死んだり、あるいは性質を変えたり・・・まるで独自の意思を持つかのように、その時々身体の状況や環境に合わせて絶えず変化しながら懸命に働いています。そんな生命の営みのひたむきさに謙虚に向き合いながら、研究を始めるきっかけとなった疑問の「答え」をゆっくりと探していきたいと考えています。そして、研究の成果が少しでも病気の予防や健やかな毎日を過ごすために役に立てればと願っています。

(ながとも ふみこ)

## 自由とジャズと総合人間学部

齋藤 嘉臣 (国際文明学系)



2013年4月1日付で、総合人間学部・国際文明学系・社会相関論関係に准教授として着任しました。専門は国際政治学です。これまで主にヨーロッパ国際関係史・イギリス外交史を軸足に冷戦史を研究してきました。

なぜ歴史かと問われれば、イギリスの国際政治学者 E.H. カーが述べたように、「歴史とは過去と現在の対話」であるからです。つまり、国際政治の歴史を紐解くことは、多分に今日的な課題に向き合う時のヒントを与えてくれるはずです。一方で、なぜヨーロッパかと問われれば、かつて明治政府がヨーロッパで築かれた国際社会の一員となることを国家枢要の課題と認めてその思想や技術を貪欲に吸収したように、(ユーロ危機にも関わらず) 自らを「シベリアン・パワー」と規定し、国際関係規範の普及を通して影響力を高めるヨーロッパの存在を、日本の参照基準として映し出すことが可能だと考えるからです。

近年は、戦後のイギリスが従事した「プロパガンダ」の系譜をたどることで、戦後ヨーロッパで文化がいかに政治利用されたのか考察し、それを支えた冷戦的な思考枠組みを研究しています。とくに、戦後の西側軍事秩序 = NATO を支えた文化的基盤 (たとえば NATO は独自の切手を発行し、学生対象のエッセー賞も設けて同盟イメージを軟化させることを試んでいます) や、東西間の文化交流 (英ソ間や米ソ間) に内包された政治力学に焦点を当てています。また、イギリス政府と国内の労働組合や知識人が協力して従事した反共活動の実態を解明することも大きな課題です。

ここに紹介した私の研究領域は、国際政治学が対象とする事象のほんの小さな部分にしすぎません。ただ、この小さな研究の積み重ねによって、権力装置としての文化を読み解くとともに、国際政治における知／権力の作用を解明することは、われわれの世界認識の仕方に対しても何かしらの

知見を与えてくれるのではないかと、密かに期待しています。

さらには、このような問題意識から派生して、現在は戦後の国際政治の中で「アメリカ文化」が与えたインパクトについても考察を進めています。具体的には、東西ヨーロッパの知識人が「アメリカ」をどう捉えたか、アメリカが東西ヨーロッパに自らをどう売り込んだか、そのさいに「アメリカ文化」がどう利用されたか、米欧間の「アメリカ」はいかに異なったのかといった論点に取り組んでいます。この点で、ジャズを通した「アメリカ」の表象を理解することは、大きな含意を与えてくれます。ジャズは自由を表象する「アメリカの音楽」として、アメリカ政府の外交戦略に利用されたのですが、ヨーロッパでは権威に対する抵抗の象徴としてジャズが捉えられ、反米知識人がジャズを好んで聴くといった現象もあり、表象する「アメリカ」と表象される「アメリカ」との間には無視できない齟齬があったためです。これは端的に言えば、冷戦とアメリカニズムとの関連性を探る作業でもあります。

そもそもジャズが自由の音楽として表象される理由は、その音楽性にあります。つまり、最低限の作法に基づきつつも自由な即興演奏を重視するのがジャズです。そしてこの特性こそ、われわれの学問に対する接し方、とくに総合人間学部で学問にふれる意味を示唆しているのではないかと思います。ジャズと同様、学問においても研究上のさまざまな作法に従いながら、問題関心を自由かつ柔軟に追及していくことで、既存の理論や定説 (という権威) に修正を迫ることはきわめて重要です。さらに、既存の学問に対する深い理解を基盤にしながらも、自由な思考で学問領域を越境することは、新たな「人間の学」の創出を目指す総合人間学部の教育像にも合致しているように思っています。自由な発想で学問を楽しむ学生と出会う機会が多くあることを、いまからとても楽しみにしています。

(さいとう よしおみ)

## 「出会いの地理学」を通じた「共生」への道を意識して

安藤 哲郎 (文化環境学系)



最近引退を表明された宮崎駿監督が『千と千尋の神隠し』でオスカー像を獲得したのは、2003年3月のことだ。ちょうど卒論や大学院進学について考えを巡らしつつ、前作『もののけ姫』の映像をよく見ていた頃で、「人間」や「自然」に対して様々な価値観をもつ登場人物たちが対立を超えて「共に」「生きる力」を得ていくという両作の根底にある物語に、感じるところが多かった記憶がある。小方登先生のゼミで「歴史地理学」を学び、そこから「人間」や「自然」を見つめてみたいと直感的に思ったのはそんな中でのことであり、門を叩くこととなった。

2004年春、晴れて人環の大学院生となり、教員となった現在まで「共生文明学専攻」(地域空間論分野)に所属している。文明と文明を(あるいは人間と自然をも)「つなぐ」役割が期待されているであろう本専攻であるが、私の専門とする地理学は、歴史・経済・都市・農村・政治・・・など様々な分野と隣接・融合しており、その「つなぐ」部分にこそ威力を発揮する学問と言える。人間の活動の所産として地表に現れるものを対象としていることが大きく影響しているだろう。そういう意味で、町を歩けば地理学のテーマが転がっているのだから、皆さんも地理学と毎日出会うことができる。

私は、古典を扱う地理学研究を進めてきた。古典(貴族の日記、文学作品など)に記述された地名を手がかりに、当時の空間構造と空間認識を探っている。例えば、院政期の説話で、登場人物にとって「期待すべき内容」(現世利益など)の話がなされる舞台は京外に多く、「好ましくない内容」(火災など)については京内に多い。また、平安貴族は京の内外を必ずしも京極で分けて捉えるとは限らず、官職や儀式・神器に関わって「京内=京極

の内側」と厳格に考える場面がある一方、京内を通常は出られない貴族が清水寺を訪れても「京内に行った」とは書かなかったりする。京の内と外が異質な空間として認識される一方で、外の寺社が平安京を支えている。境界が明瞭に扱われず混じり合っている部分があるのは、地理学そのものを見ているようでもあり面白い。

先日、ある高校の文化祭に行く機会があり、3年生がクラスごとに行う、ダンス・歌・演劇の要素を融合した総合芸術を拝見した。そこである学級のパフォーマンスに感動を覚えた。違った考え方をもつ人々がそれを超えて仲間となっていく物語を、実に一体感のあるダンスで表現していた。3年間共に学んだ月日がなせる業と思うが、いろいろな人々が共鳴しあい、ひとつになって形をつくっていく姿は、とても気持ちのいいものである。

総人・人環では、ダンスというわけにはいかないかもしれないが(それでもよいが)、しかし「共鳴し合うもの」というのが何かきつとあるように思われる。様々な学問、異なる考え方や生き方、そういう多様なものが同居し「共生」するところに総人・人環のオリジナリティがある。私の場合、小方先生に幅広く教えていただいたことに加え、西山良平先生のゼミにも長く参加させていただいたことで、違いを楽しむ機会を多く得ることができた。皆さんにも、春・秋の人間・環境学フォーラムをはじめ、集まる場もいくつか用意されているから、院生時代から積極的に参加してきた身としては、ぜひ足を運ばれることをお勧めしたい。

地理学は「出会いの学問」と、金坂清則先生から教えられたことが最近少し分かるようになってきた。それだけに、人環のOBとしても教員としても、これから先も様々な出会いを続けていくであろう地理学を通じて、総合人間学部で学ぶ皆さんに少しでも「共生」を意識してもらえるように努めたい。

(あんどろ てつろう)

## 私たちのなかの他者、東洋の心と身

金 志玟 (国際文明学系)



2013年4月1日付で、総合人間学部・国際文明学系（人間・環境学研究所、歴史文化社会論講座、東アジア文化論）に着任致しました。

高校時代の私は、大学に入るとか、どのような職業に就きたいということには興味がなく、私を虜にした真理、死、解脱、自由、といったものとどう向き合うかに悩まされていました。出家願望(?)から、地球上の人々がそのような問題をどのように考え、どのような答えを出してきたのかを鳥瞰したい、という方向へと変わったのは、大学に宗教学という学科があることを知ったからです。

もちろん、宗教学は世界宗教の案内役とは限りません。宗教学という分野は、伝統的な神学や哲学とは一線を画す、新しい視座と問題意識を抱えており、その学術史が物語るものは、いわゆる「宗教」に興味を持つ人々が知りたがるものとはほど遠いかもしれません。極端に言えば、アカデミズムの前提まで問い直す場となっている感がありますが、素朴な私の理解をいわせて頂きますと、宗教学は、宗教のかたる「真理」を問題とするよりは、宗教を求める「人間」について探究するところといえましょう。

ソウル大学の宗教学科に進んだ私は、道教概論という授業に出会いました。ユダヤ教・キリスト教・イスラム教の一神教、仏教や印度の宗教なら、浅いとはいえ、何となく馴染んできたつもりでしたが、東アジアの思想と宗教は（そもそも「宗教」概念を東アジアの思想文化に当てはめていいのか、という議論もあります）、ほとんど馴染みがなかったことに気づかされました。

その中でも、「不老不死」というタグ付けの道

教——身体と精神を二分せず、身体を神々しく、聖なるものとして語る思想や実践の体系——が存在するとは、文字通り、別世界を見るようでした。いわゆる世界宗教では、身体に密着している欲望を捨て、より高い次元への高揚を語りますが、道教では生身をもって超越を語る、その思想と実践の体系に限りなく魅了されました。

それから長い道程となりました。まずは道教を思想史のなかから見てみたいと、京大の門をたたいた私を待っていたのは、中国学という巨大な城でした。日本の漢文読み、訓読が物語るように、長い伝統を持つ学問の歴史も泰山のような存在感を訴えるものですが、20世紀以降に限定すると、現象学や解釈学の試みとどこか似通っているところがありました。私たちの言語・考え方・歴史性が編み出している先入観からできる限り離れ、その思想が生まれたコンテキストに戻り、そのありようがあるがままに描き出そうとする、あるいは、近代以前の中国人が考えてきた思考の枠組み、それ自体を理解し、解体し、再び現代の言葉で立て直す、という試みが行われているところといえましょうか。そこで向き合っているのは、外の他者ではなく、私たちがヨーロッパ中心の世界に仲間入りをするために捨て去った、私たち自身の一部でもあったものです。

中国の思想文化における、心と身にたいする問いかけと答え、それらと向き合うことは、私たちのなかにある、しかし忘れられている「内地」を探究することに他なりません。そのありようを理解していくことは、過去に戻るのではなく、現在とまったく無関係のことでもない、と私は考えています。理解は、つねに変容をもたらすものですから。

(きむ・じひょん)

## 自分の学生生活を振り返って

神川 龍馬 (自然科学系)



私の学生生活は授業と部活動とバイトで占められていたといっても過言ではない。今思えば、毎日がとても詰め込まれた日々だったと思う。ある時期には、朝から部活の練習があり、同級生と朝マック。授業にでて百万遍ローソンで買ったパンで早弁をし、昼はガッツリ系のジャンボチキン定食をハイライトで。午後も授業で夕方から夕練、夜はバイト（で、その後飲みに行く）。もちろん次の日以降も同様の毎日を過ごすわけである。

今考えれば「よくぞリカバーした!!!」と思う数々の失敗をしたこともたくさんあったが、部活動では協調性を学ばせていただき、バイトでは仕事をするとはどういうことかを学ばせていただいた。そこで学んだ精神は未熟ではあるけれども、今でも忘れずに日々の糧としている。

部活動では、一年生からレギュラーとして試合に出させていただいた。正直、1・2年生では甘えさせてもらっていたし、今思えば「良い気」になっていた。平たく言えば調子に乗っていた。しかし、3・4年生になり、後輩の存在を否応なしに感じなければいけない時にふと気づいた。試合が成立するのもレギュラーでない人たちが裏方をしてくれるから、試合に出られるのも自分をレギュラーだと認めてくれる周りがあるからだ。応援が無ければ、支えてくれる人がいなければ、試合に出ても何の意味もない。

バイトは自分にとって、金を稼ぐ場であると同

時に、今の自分に何ができるかを気づかせていただく場でもあった。私は1回生時から（今はもう無くなってしまったが）とあるお寿司屋さんでお世話になったが、当時の自分は世の中をなめきった若造であったため、板前さんに叩き直していただいた。今でも若い板前さんに言われた一言が胸に刻まれている。「仕事をもらえるもんと思うなよ。仕事は自分で探すもんやろが。」その言葉の本質に気づかされた時、自然と口に出た言葉がある。「今XXXは終わっていますが、他にすることないですか？」受け身ではなく、自発的に何かして働こうとした瞬間だった。今思えば、なぜ叱られるまで気付かなかったのか不思議ではない。おそらく自分が相当未熟者であった証拠なのだろう。

誤解を招かないように、ここで敢えて強く強調しておきたい。私は、バイトにいそしめとか、部活に青春をささげるべきだとかを主張したいのではない。ただ単純に、だらだらと過ごす日々だけで大学4年間を過ごしてほしくないというだけだ。たまにはダラダラしたい日もあるだろうし、いろんなことをさぼりたい日もあるだろう。それが人間だ。しかし、自学自習の精神が溢れる（べき）この京都大学で4年間を過ごすのだから、そこには自主性や自らが望むものをつかむために費やす時間があってもいいはずだ。総合人間学部におけるすべての学生の365日×4年の日々に、何かしら自分なりの成し遂げ学び得たものがあったらほしい。これを強く望んでいることを、結びの一文として終わりとしたい。

(かみかわ りょうま)

## 電子の声に耳を傾ける

吉田 鉄平 (自然科学系)



本年4月より物質関連論講座に准教授として着任いたしました。大学教員として初めて教壇に立ち、自分の学生時代にどんな講義が一番、頭に残ったか、を思い出しながら教えることの難し

さ、面白さを感じています。私は生まれも育ちも関東で、大学に入学してから今年3月までの20年間の大半を東大で研究生活を送ってきました。京都は修学旅行で訪れるところ、という縁遠い存在でしたが、ここ数年、共同研究や研究会で訪れる機会が増えていたところ、縁あって京都に住むことになりました。

典型的な理系人間として高校時代は数学の美しさに憧れていたのですが、大学では抽象的な論理体系よりも、目に見える物の動きを美しい数式で説明できることに魅力を感じ物理学科に進学しました。大学院では理論にしようか実験にしようか迷い、実際の物質や現象に触れて五感を使うことが必要だと思い物性実験を選びました。この選択に間違いはなかったと思っています。

物理学という量子力学の言葉でできた世界に浸かってきたため、キャンパスの中に哲学や文学の香りがする人環の雰囲気が大変新鮮に感じています。学生時代は書道サークルで部長を務め、文学部の学生と語り刺激を受ける機会が良くありました。その時の自由な雰囲気が思い出されます。漠然と「自由の学風」という言葉に期待を抱いていたのですが、着任してみると明らかに東大とは異なる空気が流れていることに気づきました。具体

的に言葉で表すことが難しいのですが、颯爽と風を切って自転車を走らせる学生たちからポストク時代に滞在したスタンフォード大学の空気を思い出しました。緑豊かな吉田山の麓にあるキャンパスの環境も大変気に入りました。

さて私の専門は物性物理の実験研究です。高温超伝導体の電子状態を中心に光電子分光という実験手法を使って研究しています。電子と電子はクーロン相互作用で反発しますが現実の物質中には電子が $10^{23}$ のオーダーで存在しているので、すべての電子間のクーロン相互作用を正確に取り扱うことはできません。今から約四半世紀前に発見された高温超伝導体は電子間相互作用が強い物質であることが分かり、そこから現在に至るまで「強相関電子系」の研究は物性物理の中で大きく発展しました。しかし高温超伝導のメカニズムは現在も未解明です。歴史を振り返ってみれば従来型の超伝導が発見されてから理論的に解明されるまでに45年以上の歳月が必要でした。高温超伝導は、従来の理論的枠組みで説明できそうで説明できていないことを考えると新しい発想が必要なのかもしれません。光のエネルギーをもらって物質から外に飛び出てきた光電子はその動きを分析すると、さまざまな模様を描き出し視覚的にその物質の性質を教えてください。電子の動きは電子の気持ちになれば理解できると思うのですが人間の世界と同様になかなか複雑です。電子の声に静かに耳を傾けることが新しい発想につながるかもしれません。悠久の流れの中にある京都だからこそ、流行に流されず地に足のついた研究を目指したいと思います。

(よしだ てっぺい)

## 京大生のプライド

吉田 寿雄 (自然科学系)



私は、今年4月に総合人間学部自然科学系 化学・物質科学分野（大学院人間・環境学研究科 相関環境学専攻 物質相関論講座 物質機能相関論分野）に教授として着任しました。1987年に京

都大学工学部の当時の石油化学科に入学し、大学院分子工学専攻に進学し、博士課程の途中で職を得たため1995年に名古屋大学に助手として赴任して以来、18年ぶりに京大に戻ってきたことになります。京大入学当初教養部時代、つまり、25～26年前頃に、私はこの吉田南キャンパスをうろろろしていたわけです。

入学してすぐに体育会・水泳部に入ったため、このキャンパスよりも西部のプールにいた時間の方が長かったかもしれません。最小限の努力で単位を取って留年だけは避け、水泳部を引退したら勉強もがんばろう！なんて思っていた、当時としてはよくあるタイプの学生でしたから、ここで受けた授業の記憶を忘れてしまったのかそういう出来事がそもそもなかったのかはわかりませんが、ともかく着任前はほとんど本キャンパスでのことを思い出せないでいました。着任して、吉田南キャンパスを歩くと、建物はずいぶんと改修されていて、一夜で出現したキリンの絵も無くなり、時の流れを感じました。北門から見える総合館は京大じゃないと思えるくらいに立派になっているし、昔はなかった人環棟も出現しているし。一方で、図書館やD号館からE号館（今の吉田南2号館～4号館）は、多少の変化はあるものの当時のままの雰囲気を残していて、流れる風も音もちっとも変っていない。このエリアに踏み入れた時に、連鎖的

にいろんなことを思い出し始めました。以来、いろいろと懐かしみながら、授業も学生実験も楽しんで担当していけそうです。

さて、体育会系学生だった自分も次第に勉強と研究（と恋愛）に打ち込み始め、博士課程で学生結婚し（デキ婚じゃないよ）、名古屋で助手・助教授・准教授を経て、今は京大教授です。自分というのなんですが、それなりの努力を重ねて今があります。その過程で、いちばん芯にあったもの、それは「京大卒であることの自信と責任感」でした。言い換えれば京大生のプライドでしょうか（あるいは京大魂？）。なにか困難を前にした時、京大卒である自分ができなくて誰ができる？だれがやってくれる？自分ができなければ現時点では人類の負けである！なんて、すこしオーバーですが、そうやって自分をけしにかけて逃げずにやってきました。これが、現在の総合人間学部の学生諸君にも伝えたいことです（伝わるといいなあ）。

さて、私は触媒化学を通じて、資源・環境・エネルギーにかかわる諸問題の解決に少しでも貢献しようと、日々頑張っています。特に、太陽エネルギーと光触媒を使って新しい化学を開拓しようと、太陽エネルギーの化学エネルギー（水素）への変換【太陽エネルギー変換】、太陽光による二酸化炭素の還元【人工光合成】、新規な優れた化学反応の創出【グリーンケミストリー】、といった課題について、物質（光触媒）の構造と機能（光触媒作用）の相関を明らかにしながら、取り組んでいます。人類は太陽光を巧みに利用してゆかなければ現在の社会を存続することができません。この困難な課題にもなんとか京大生のプライドをもって、着実な研究を続けてゆきたいと思います。

（よしだ ひさお）



<b>I</b>	uman	<b>S</b>	<b>編集後記</b> ◆『総合人間学部広報』第52号をお届けいたします。今号も「外から見た総人・人環」をテーマに、三人の先生方からご寄稿いただきました。本当のグローバル化とは何かを理解した改革がまだ見えていない京都大学の現状と、我が学部・研究科がめざすべき「おもろい」研究と教育について指摘をいただいたように思います。辛口ながらもユーモアたっぷりの文章には、総人・人環の「こころ」が宿っているようです。
ntegrated	<b>H</b>	tudies	

新しくご着任された7名の先生方のご挨拶からは、総人・人環に加わった新しい魅力を知っていただくことができます。どうぞ一読ください。

(T・S)

人間・環境学研究科  
総合人間学部

広報委員会